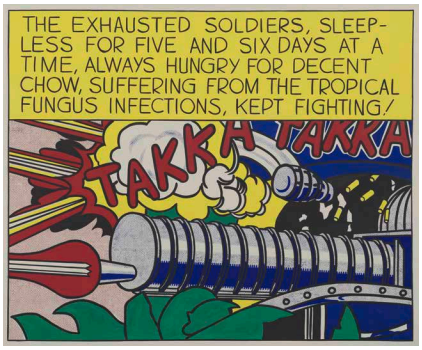
MUSEUM LUDWIG COLOGNE

HISTORY OF A COLLECTION
WITH CIVIC COMMITMENTS



[ドイツ ケルン] ルートヴィヒ美術館展

20世紀美術の軌跡 **市民が創った珠玉のコレクション**

PRESS RELEASE

MUSEUM LUDWIG COLOGNE
HISTORY OF A COLLECTION WITH CIVIC COMMITMENTS

開催主旨 About This Exhibition

このたび、ドイツのルートヴィヒ美術館が所蔵する、20世紀初頭から現代までの優れた作品をご紹介する「ルートヴィヒ美術館展 20世紀美術の軌跡―市民が創った珠玉のコレクション」を開催いたします。

ケルン市が運営するこの美術館のコレクションは、市民のコレクターたちによる寄贈を軸に形成されてきました。二度の世界大戦、東西ドイツへの分裂から統一へといたる激動の20世紀を生きた寄贈者たちは、同じく困難な状況に翻弄され、ときに立ち向かい、またときに社会の新しい息吹に鼓舞された、同時代の美術家たちに目を向けました。

本展覧会では、ルートヴィヒ美術館のコレクションの代表的な作品を、寄贈にかかわったコレクターたちに焦点を当ててご紹介します。なかでも、館名に名を冠するルートヴィヒ夫妻は、美術館の顔とも言うべき存在です。ともに大学で美術史を学んだ実業家のペーターと妻イレーネが寄贈した、ヨーロッパ随一の優れたポップ・アートのコレクションやロシア・アヴァンギャルドの貴重な作品群、数多くのピカソの優品は、ルートヴィヒ美術館のコレクションの核を形成しています。一方、表現主義や新即物主義などドイツ近代美術の名品の多くは、ケルンで弁護士として活躍したヨーゼフ・ハウプリヒに由来します。彼は、第二次世界大戦から守り抜いた貴重な作品群を、戦後まもなくケルン市に寄贈し、社会に大きな希望を与えていました。展覧会では、こうした代表的なコレクションに加え、グルーバー夫妻からの購入と寄贈をもとに圧倒的な質と量を誇るまでに成長した写真コレクションや、現代美術を振興するさまざまな取り組みを経て収蔵された2000年代以降の作品もご紹介します。

ルートヴィヒ美術館は、美術を愛する個人の活動が、寄贈や支援という行為によって社会に接合する場として機能してきました。本展覧会でご紹介する、油彩や彫刻、立体作品、映像、写真を含む152点※の出品作品は、美術館と市民との生きた交流の証です。本展覧会が、私たちの社会における美術館の意義と役割を見つめなおす契機になれば幸いです。（※一部東京会場のみでの展示作品があります）

みどころ Highlights

1 未来を買ったコレクターたち

ルートヴィヒ美術館のコレクション形成に寄与したのは市民コレクターたちでした。文化・芸術を愛し守り、次世代に継承しようとしたコレクターたちの未来への想いは、ルートヴィヒ美術館のコレクションや芸術活動の礎にもなっています。美術と社会のゆるぎない結びつきは、日本に生きる現在の私たちにとって示唆にあふれています。

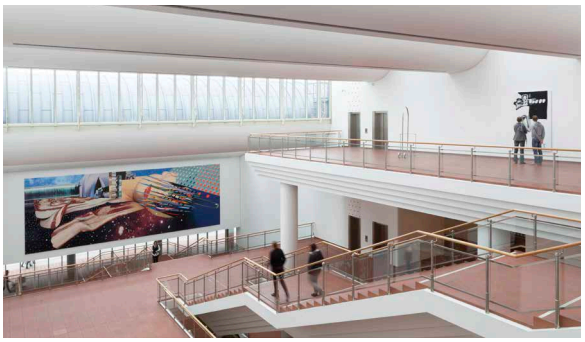
2 美術史をたどる、100年の多様な表現

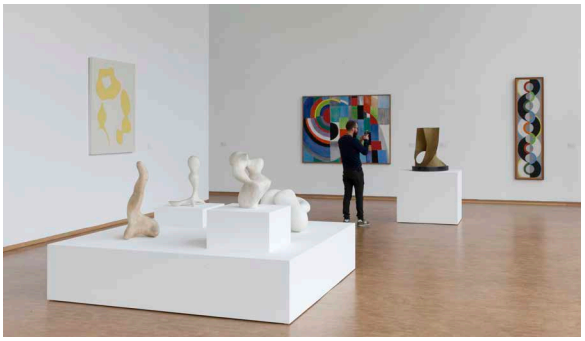
ドイツ表現主義、新即物主義、キュビスム、ロシア・アヴァンギャルド、バウハウス、シュルレアリスム、ピカソやポップ・アート、前衛芸術から抽象美術、そして2000年代以降の美術まで、20世紀初頭から今日までの多様な表現をご紹介します。また、それぞれのセクションに挿入された写真コレクションは、時代の精神を生き生きと伝えています。女性作家たちのきらりと輝く表現にも注目ください。

3 時代が息づく珠玉の152点※

20世紀前半のふたつの世界大戦と戦後の復興、東西の統一を経て、現在ではヨーロッパを牽引する国のひとつとなったドイツ。美術を通じて歴史が分かり、歴史のなかに美術が見えてくる展覧会です。人間と社会、そして歴史に迫る珠玉の152点※をお楽しみください。

ルートヴィヒ美術館とは　Museum Ludwig, Cologne

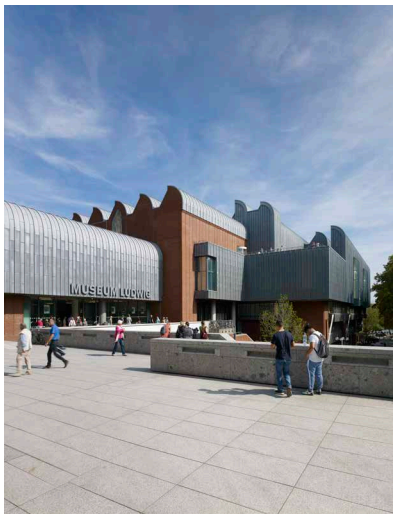




ルートヴィヒ美術館は、ドイツ第4の都市であるケルン市が運営する、20世紀から現代までの美術作品を収集・紹介する美術館です。古来、ライン河沿いの交通の要衝として発展してきたケルンは、世界最大のゴシック建築であるケルン大聖堂、ヨーロッパ最古の大学の一つであるケルン大学ほか、数多くの美術館、博物館を擁する文化の薫り高い古都です。

ルートヴィヒ美術館は、ケルン大聖堂にも隣接したライン河畔に、1986年に開館しました。その構想は、美術コレクターとして名高いペーター＆イレーネ・ルートヴィヒがケルン市に約350点の作品を寄贈した1976年に遡ります。また、同じくケルン市立のヴァルラフ＝リヒャルツ美術館からは、ケルンの弁護士、ヨーゼフ・ハウプリヒが1946年に寄贈したドイツ近代美術のコレクションを含む1900年以降の作品が移管され、ルートヴィヒ美術館の基盤が整えられました。

今日、ルートヴィヒ美術館は、ヨーロッパで最大級のポップ・アートのコレクション、表現主義や新即物主義などのドイツ近代美術とその同時代のロシア・アヴァンギャルド、世界で3本の指に入るピカソのコレクションや、写真史を網羅する質量ともに優れた写真コレクション、そして世界各地の現代美術の収集により、国際的にも高く評価されています。



ルートヴィヒ美術館ケルン現代美術協会

Gesellschaft für Moderne Kunst am Museum Ludwig Köln

ルートヴィヒ美術館ケルン現代美術協会は、現代美術を振興し、美術館の活動に主体的に関わることを目的に、1985年にラインラント地方のコレクターが集まって設立した会員制の組織である。現在約650人の会員は、経済や学術、芸術など、さまざまな分野と世代にわたり、2018年には、アメリカに国際支部も設立された。協会の活動範囲は広く、作品の購入や展覧会の開催を支援するほか、出版やさまざまなプログラムやイベントも実施している。なかでも、ケルンのコレクターでヴァルラフ＝リヒャルツ美術館の修復家だった人物の名を冠す、優れた現代作家を顕彰する「ヴォルフガング・ハーン賞」は、1994年より毎年続く協会の主要なプロジェクトである。受賞作家の作品は美術館に収蔵され、展覧会も開催される。また、2005年に若手会員の発案で開始された「ユンガー・アンカウフ」は、ルートヴィヒ美術館の館長や学芸員と協力し、新進気鋭の作家の作品を購入するユニークな事業である。

ルートヴィヒ美術館とその支援者たち

ルートヴィヒ美術館の大きな特徴は、20世紀美術の軌跡を辿り、21世紀以降の動向をも視野に入れたコレクションの形成が、市民たちの関与に支えられている点にある。ここではまず、ルートヴィヒ美術館の設立そしてそのコレクションの発展において、重要な役割を果たしたコレクターたちを紹介する。

美術館が所蔵するドイツを中心とした近代美術作品の多くは、1946年にケルン市に寄贈されたヨーゼフ・ハウプリヒ（図0-2）のコレクションと、その後彼が設立した基金によって購入された作品に由来する。美術館とハウプリヒの目的は、ナチ・ドイツ時代に「退廃芸術」として公共の場から駆逐されたドイツ表現主義をはじめとする近代美術の復権とそのコレクションの再建にあった。1957年には、ゲオルク＆リリー・フォン・シュニッツラー夫妻（1884-1962/1889-1981）（図0-1）が収集した画家マックス・ベックマンの作品群が、そして1958年には、ピカソやマティス、ココシュカやクレーなど近代美術の重要作品を含む、ヴィルヘルム・シュトレッカー（1884-1958）のコレクションが収蔵されて、更なる充実化が図られた。

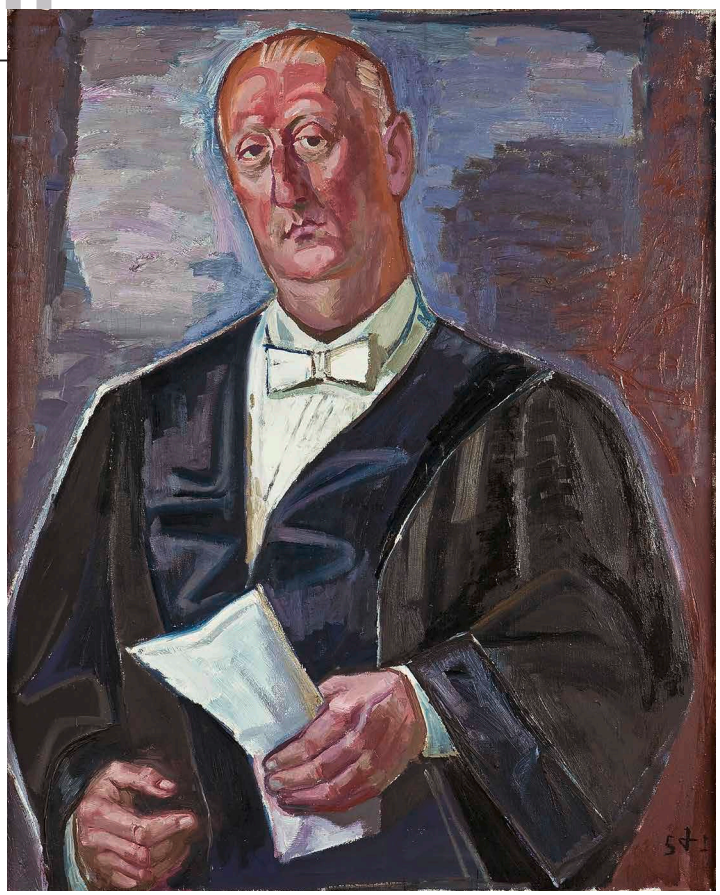
1976年、ドイツ表現主義と同時期に展開したロシア・アヴァンギャルドの優れた作品群を美術館にもたらしたのは、ペーター＆イレーネ・ルートヴィヒ夫妻（図0-4）だった。彼らは同時にポップ・アートの包括的コレクションを寄贈し、それによってルートヴィヒ美術館開設のみならず、美術館における1960年代以降の同時代美術の収集という契機をもたらした。同じ年、画家エルンスト・ヴィルヘルム・ナイの支援者として知られていたギュンター＆カローラ・パイル夫妻（1908-1974/1907-1992）（図0-3）も、所蔵する数多くのナイ作品のほか、エルンストを含む近代美術作品群を寄贈した。さらに1977年には、写真芸術発展の支援者でありコレクターであったレオ・フリッツ＆レナーテ・グルーバー夫妻（1908-2005/1936- ）のコレクションが収蔵され、ルートヴィヒ美術館写真・映像部門の礎となった。重要なのは、彼らの美術館に対する支援が、ハウプリヒ同様、一過性ではなく継続的なものであったことだ。その意味で、ルートヴィヒ美術館は、まさに市民が創ったコレクションなのである。

JOSEF HAUBRICH

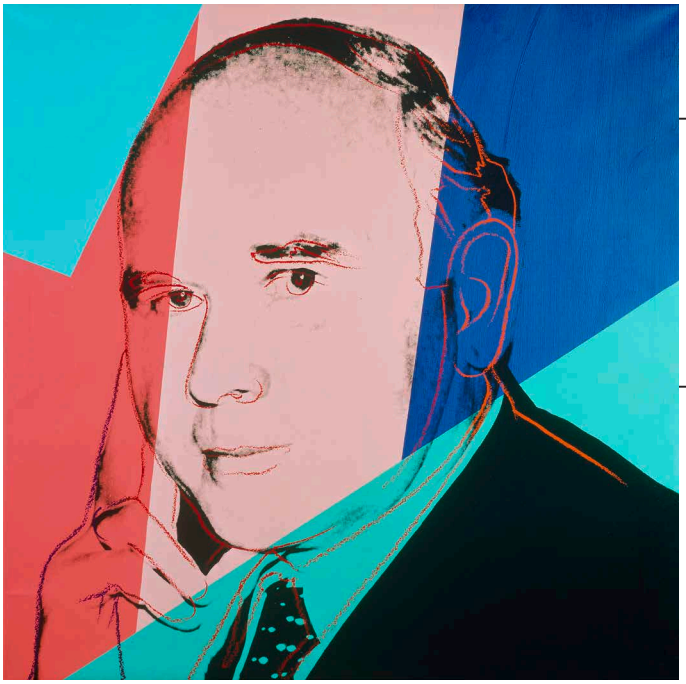
ヨーゼフ・ハウプリヒ

（1889／ケルン－1961／バート・ミュンスターアイフェル）
(1889/Cologne – 1961/Bad Münstereifel)

ケルンで弁護士として活動する傍ら美術品を集めていたハウプリヒは、1920年代より、表現主義や新即物主義などドイツ近代美術の収集に本格的に乗り出した。1933年に政権をとったヒトラー率いるナチ党は、1937年に退廃芸術展を開催し、今日では評価の高い近代美術や抽象芸術をドイツ全土の公立美術館から没収した。ハウプリヒは、没収された作品をナチの御用画商から購入するなど、第二次世界大戦中にも細々と収集を続けた。そして、終戦まもない1946年に、戦火から守り抜いた珠玉のコレクションをケルン市に寄贈したのである。作品は、まず旧ケルン大学の建物で公開され、21歳の学生だったペーター・ルートヴィヒもこれを見て深く感銘を受け、後年の美術館支援活動に大きな影響を与えたと言われる。その後ハウプリヒのコレクションは、戦争で破壊されたヴァルラフ＝リヒャルツ美術館が再建されるまでの約9年間、ドイツ国内はもとよりヨーロッパ各地を巡回し、多くの人々に希望を与えた。



0-2 オットー・ディクス《ヨーゼフ・ハウプリヒ博士の肖像》
1951年、油彩／カンヴァス
Otto Dix, *Portrait of Dr. Josef Haubrich*
1951, oil on canvas
100.0 × 81.5 cm, ML 76/2869
＊1951年 ヨーゼフ・ハウプリヒより寄贈／1951 Donation Haubrich



0-4 アンディ・ウォーホル
《ペーター・ルートヴィヒの肖像》
1980年、アクリル絵具／カンヴァス
Andy Warhol, *Portrait of Peter Ludwig*
1980, acrylic on canvas
105.0 × 105.0 cm, ML 10076
＊ 1986年 個人より寄贈／1986 Private Donation

PETER LUDWIG
ペーター・ルートヴィヒ

（1925／コブレンツ－1996／アーヘン）
(1925/Koblenz – 1996/Aachen)

IRENE LUDWIG
イレーネ・ルートヴィヒ

（旧姓：モンハイム、1927／アーヘン－2010／アーヘン）
(1927/Aachen – 2010/Aachen)

ペーター・ルートヴィヒとイレーネ・モンハイムは、ともにマインツ大学で美術史を学び、ペーターが1950年にピカソで博士号を取得した翌年に結婚した。モンハイム家の事業を継いだペーターは、実業家として大きな成功を収めた。早くから美術作品の収集を始めた夫妻は、「世界芸術」という構想のもと、古代、中世の美術から民族芸術や現代美術まで幅広く収集した。1960年代に始まるポップ・アートを中心とした同時代のコレクションは、「1960年代の美術」展（1969年）としてケルンのヴァルラフ=リヒャルツ美術館で大々的に公開されて話題を呼んだ。夫妻は、この展覧会への反響の大きさにコレクターとしての社会的役割を自覚し、1976年、20世紀の美術に特化した新しい美術館の創設を条件にケルン市に作品を寄贈した。その後もヨーロッパ各地の美術館を支援した夫妻のユニークな点は、公立美術館への協力を通じてコレクションを社会に還元したことである。1996年にペーターが世を去るとイレーネは、イレーネ＆ペーター・ルートヴィヒ財団を設立し、キューバや中国にも協力を拡大した。今日、約14,000点にも及ぶコレクションは、3大陸にまたがる世界の26の公的機関に寄贈、寄託され、うち12の機関にルートヴィヒの名が冠されている。

0-3 フローレンス・アンリ《ギュンター＆カローラ・パイル》
1957年、ゼラチン・シルバー・プリント
Florence Henri, *Günther and Carola Peill*
1957, gelatin silver print
17.3 × 16.7 cm, ML/F 1983/0013
＊ 1983年 パイル夫妻より寄贈／1983 Donation Peill
※京都会場でのみ展示

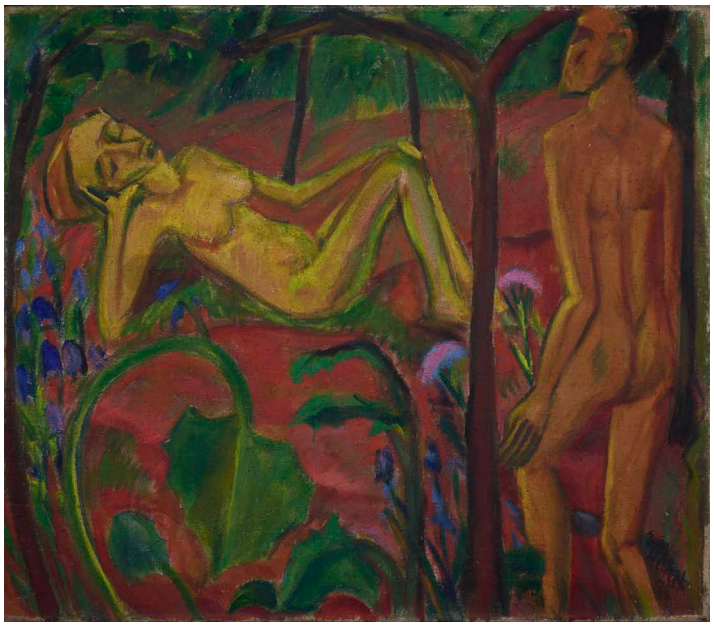
0-1 マックス・ベックマン《リリー・フォン・シュニッツラーの肖像》
1928/29年頃、グラファイト／紙
Max Beckmann, *Portrait of Lilly von Schnitzler*
c. 1928/29, graphite on paper
26.5 × 36.2 cm, ML/Z 1974/025
＊ 1974年 マティルデ・Q・ベックマン（ニューヨーク）より寄贈／1974 Donation Mathilde Q. Beckmann, New York　※東京会場でのみ展示

ドイツ・モダニズム――新たな芸術表現を求めて

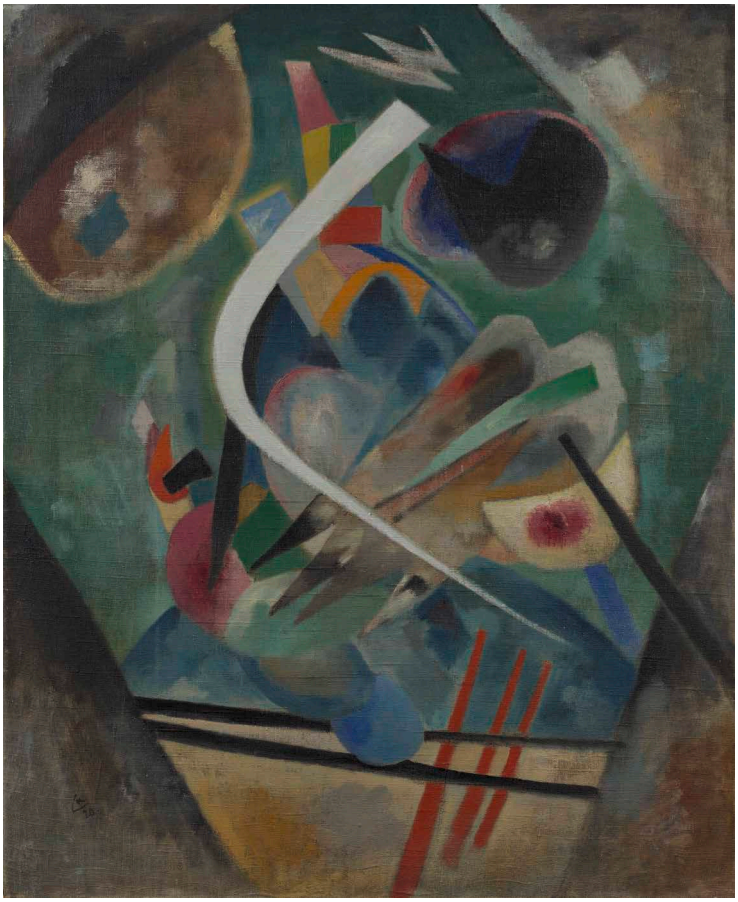
19世紀末から20世紀初めにかけてのドイツでは、新たな芸術表現を模索する芸術家グループが生まれ、彼らを支える画廊の活動が活発化した。中でも、1905年にドレスデンで結成された「ブリュッケ(橋)」と1912年にミュンヘンで誕生した「青騎士」は、新時代の芸術傾向を提示した点で重要である。ともに19世紀的な写実主義や印象派的な光学的視覚表現を脱しようとした点は同じだが、前者は、人間がもつ根源的かつ原始的な生命力を激しい筆致と鮮烈な色彩で表現しようとし、後者は、あらゆる芸術に通底する共通項を模索し、その過程で西洋的で因習的な造形表現の超過を試みて、一部は非具象的傾向を強めた。ヘッケル《森の中の情景》(図1-1)とカンディンスキー《白いストローク》(図1-2)は、この二つの動向をよく表す作品である。彼らの作品や前衛的芸術動向は、主に同時代美術を扱う画廊を通じて拡がっていった。その代表的存在が、ヘルヴァルト・ヴァルデンが運営していたベルリンのシュトゥルム画廊である。ヨーゼフ・ハウプリヒは、ミュンヘンとベルリンでの法学生時代に、両都市の活発な芸術シーンに触れて関心を高め、ヴァルデンのもとでヴィルヘルム・レームブルックの彫刻を購入することから近代美術のコレクションを始めた。彼が最初に収集対象としたのは、ブリュッケの作家たちと、社会存在としての人間を虚飾なく描き出そうとする「新即物主義(ノイエ・ザハリヒカイト)」の画家たちの作品だった。本展には、その代表作のひとつ、ネーデルラント絵画研究を専門とする美術史家エドゥアルト・プリーチュを描いたグロスの作品(図1-3)が出展される。本作品は、ナチ時代に「退廃芸術」としてドレスデンの美術館から接収され、戦後にハウプリヒが設立した基金によって買い戻された作品でもある。そのほか、ここでは彼のもうひとつの収集対象であったラインラント地方の画家たち、そしてバルラハをはじめとする彫刻家たちの作品も紹介する(図1-4)。

20世紀は写真・映像の時代でもあり、ルートヴィヒ美術館は開館直後からコレクションにおける写真作品の充実化を図った。写真芸術の黎明期においては、例えばデュールコープ作品(図1-5)のように絵画や版画にその構成の範をとったピクトリアリズムが主流であったが、写真とは何かを考える過程で、バイヤー《メタモルフォーゼ》(図1-6)を一例として、被写体との関係性や独自の構図に時間感覚、さらには写真技法・素材そのものに注目した作品が登場してきた。1900年頃から1940年頃にかけての写真芸術の変遷も本章で紹介する。

1-3 ジョージ・グロス《エドゥアルト・プリーチュ博士の肖像》
1928年、油彩／カンヴァス
George Grosz, *Portrait of Dr. Eduard Plietzsch*
1928, oil on canvas, 110.0 × 79.5 cm, ML 76/2814
＊ 1949年 ハウプリヒ基金により購入／1949 Acquisition with funds from the Haubrich-Fonds
ドレスデン絵画ギャラリー旧蔵／Former Collection of National Painting Gallery in Dresden



1-1 エーリヒ・ヘッケル《森の中の情景》
1913年、油彩／カンヴァス
Erich Heckel, *Forest Scene*
1913, oil on canvas, 70.0 × 81.0 cm, ML 76/2747
＊ 1946年 ヨーゼフ・ハウプリヒより寄贈／1946 Donation Haubrich



1-2 ワシリー・カンディンスキー《白いストローク》
1920年、油彩／カンヴァス
Wassily Kandinsky, *White Stroke*
1920, oil on canvas, 98.0 × 80.0 cm, ML 10003
＊ 1977年 購入／1977 Acquisition
ニーナ・カンディンスキー（パリ）旧蔵／Former Collection of Nina Kandinsky, Paris

1-4 エルンスト・バルラハ《うずくまる老女》
1933年、木
Ernst Barlach, *Squatting Old Woman*
1933, wood
56.0（高さ）× 33.0 × 30.0 cm, ML 76/SK 0047
＊ 1948年 購入／1948 Acquisition

1-5 ルードルフ・デュールコープ《読書する若い女》
1903年、ピグメント印画／厚紙
Rudolf Dührkoop, *Reading Young Woman*
1903, pigment paper on cardboard
15.0 × 11.0 cm（イメージ）／19.2 × 14.7 cm（台紙）, FH 03259
＊ 2005年 アグファ・コレクションより購入／
2005 Acquisition Sammlung Agfa
エーリヒ・シュテンガー（ベルリン）旧蔵／
Former Collection of Erich Stenger, Berlin

1-6 ヘルベルト・バイヤー
《メタモルフォーゼ》
1936年、
ゼラチン・シルバー・プリント
Herbert Bayer, *Methamorphosis*
1936, gelatin silver paper
25.6×34.2 cm（イメージ）／
28.0×35.4 cm（台紙）
ML/F 1977/0056
＊ 1977年 グルーバー夫妻より購入／
1977 Acquisition Gruber

ルートヴィヒ美術館の写真コレクションについて
Museum Ludwig's Photography Collection

ルートヴィヒ美術館は、写真が誕生した19世紀前半から現代までの写真史を網羅する、約70,000点にも及ぶヨーロッパ屈指のコレクションを所蔵する。その礎となったのは、1977年に初めて収蔵され、その後も寄贈と購入が続いたレオ・フリッツ＆レナーテ・グルーバーのコレクションだった。グルーバーは、写真と映像に関する世界有数の見本市「フォトキナ」で1980年まで写真展を企画し、親しい友人のマン・レイをはじめ、国内外の多くの写真家と交流した人物である。また、ダゲレオタイプなど19世紀の貴重な写真作品を含む「アグファ・フォト・ヒストラマ」の存在も忘れてはならない。このコレクションは、ドイツの光学機器、写真フィルムの製造企業として知られたアグファが、科学者で写真史家のエーリヒ・シュテンガー（1878-1957）の個人コレクションを1955年に購入したことに始まる。アグファが拡大した約13,000点のコレクションは、1985年にケルン市に貸与され、1986年に開館した新館の一角に場所を得て公開された。2005年には競売にかけられて散逸の危機に陥ったが、ルートヴィヒ美術館に購入されて現在にいたっている。

ロシア・アヴァンギャルド ── 芸術における革命的革新

ドイツで表現主義が拡がりを見せていた同じ頃、ロシアでも社会の大変革と連動し芸術における新たなうねりが生まれていた。1917年の社会主義革命によって帝政が倒れると、ロシア・アヴァンギャルドと呼ばれる芸術実践や理論における抜本的な革新運動は加速した。ミハイル・ラリオーノフは「レイヨニスム」を提唱して、人間の色彩感覚や視覚そのものを左右する光線に注目して線・リズム・色彩を絵画画面において綜合しようとし、マレーヴィチは「スプレマティズム」を提唱して、絵画を現実との対応関係から切り離し、円や正方形といった基本的造形要素のみで構成する絶対的に自律した無対象絵画を生み出した（図2-1）。一方、あたかもイコンのような趣を見せるゴンチャローワ《オレンジ売り》（図2-2）に見られるように、彼らはロシアの民衆たちに根ざした文化を積極的に参照した。さらに新たな社会と芸術を標榜する彼らが、その理念の伝達手段として注目したメディアが写真であった。ここでは、日々の生活のあらゆるものを独自の構成主義的視線でとらえたロトチェンコ（図2-4）や、社会主義理念を映し出すゼルマ（図2-3）らの作品も紹介する。

「世界芸術」を構想し、冷戦期を生きたルートヴィヒ夫妻にとって、社会主義を背景とした芸術も重要な収集対象であった。夫妻のロシア・アヴァンギャルドのコレクションは、1976年の構想時、さらにはイレーネ没後の2011年に寄贈・遺贈され、それによってルートヴィヒ美術館は、ロシア以外で最も包括的なロシア・アヴァンギャルドのコレクションを持つに至っている。

2-1 カジミール・マレーヴィチ
《スプレムス 38番》
1916年、油彩／カンヴァス
Kazimir Malevich, *Supremus No. 38*
1916, oil on canvas
102.5 × 67.0 cm, ML 01294
＊ 2011年 ルートヴィヒ・コレクションより寄贈／
2011 Donation Ludwig Collection

2-4 アレクサンドル・ロトチェンコ
《ライカを持つ少女》
1934年（プリント：1934年以降）
ゼラチン・シルバー・プリント
Aleksandr Rodchenko
Girl with Leica
1934 (print after 1934)
gelatin silver paper,
white and black photography
40.0 × 29.0 cm
ML/F 1978/1072
＊ 2011年 ルートヴィヒ・コレクションより寄贈／
2011 Donation Ludwig Collection

2-2 ナターリヤ・ゴンチャローワ
《オレンジ売り》
1916年、油彩／カンヴァス
Natalia Goncharova
The Orange Vendor
1916, oil on canvas
131.0 × 97.0 cm, ML 01484
＊ 2011年 ルートヴィヒ・コレクションより寄贈／
2011 Donation Ludwig Collection

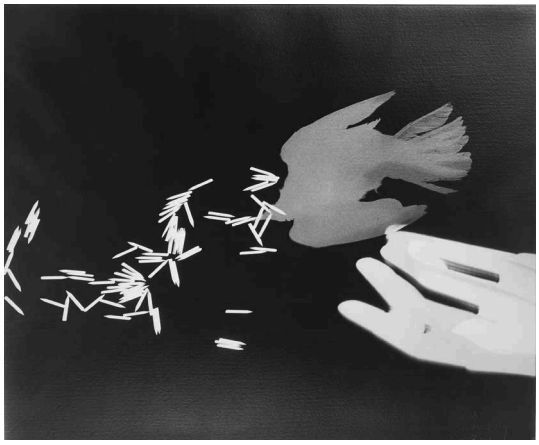
2-3 ゲオルギ・ゼルマ《村祭りと荷馬車》
1930/34年、ゼラチン・シルバー・プリント
Georgy Zelma, *Village Festival and Carriage*
1930/34, gelatin silver print, 17.4 × 23.0 cm, ML/F 1992/0112
＊ 2011年 ルートヴィヒ・コレクションより寄贈／2011 Donation Ludwig Collection

ピカソとその周辺 —— 色と形の解放

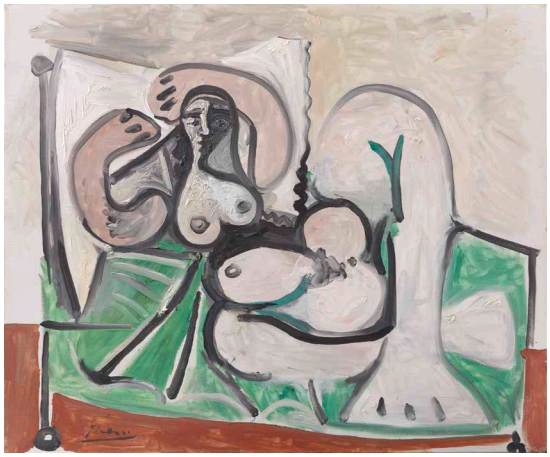
ペーター・ルートヴィヒは、1950年に「同世代の人々の人生観の表れとしてのピカソの人物画」と題した論文で博士号を取得した。しかし、ペーターそして妻イレーネがピカソの実作品を目にしたのは1955年にケルンで開催された大回顧展であり、これを機に夫妻はピカソ作品の収集を開始した。二人にとってピカソは、戦時下の精神的不安感が伝わる《アーティチョークを持つ女》(図3-3)に見られるように、キュビスムに代表される革新的な創造行為で生の軌跡を全人的に表現する芸術家であり、自らの時代を象徴する存在だった。そのため夫妻の収集対象は、ピカソの全時代全ジャンルにおよび、なかでも特に当時はまだ評価の定まらなかった晩年の作品を、精神の自由で伸びやかな表現として高く評価し数多くコレクションしている。生命力に溢れた肢体が印象的な《眠る女》(図3-4)はその代表例である。夫妻のコレクションのうち90点の作品が1994年に寄贈され、同年寄託となった774点の作品は2001年に寄贈された。ここでは、ルートヴィヒ美術館のピカソ・コレクションから各時代を代表する作品とともに、パリで活動したピカソと同時代の作家たちの作品も紹介する。その中の何点かは、ハウプリヒ旧蔵のヴラマンク《花と果物のある静物》(図3-1)のように20世紀の早い時期にドイツで公開・収蔵されたものである。また、同時期にレイヨグラフやソラリゼーションといった新たな写真芸術の手法を開発したマン・レイの作品も併せて紹介する(図3-2)。

3-1 モーリス・ド・ヴラマンク《花と果物のある静物》
1911年、油彩／カンヴァス
Maurice de Vlaminck, *Still Life with Flowers and Fruit*
1911, oil on canvas, 60.0 × 73.0 cm, ML 76/2773
＊ 1946年 ヨーゼフ・ハウプリヒより寄贈／1946 Donation Haubrich

3-3 パブロ・ピカソ
《アーティチョークを持つ女》
1941年、油彩／カンヴァス
Pablo Picasso, *Woman with an Artichoke*
1941, oil on canvas
195.0 × 130.0 cm, ML 01291
＊ 1994年 ルートヴィヒ・コレクションより寄贈／
1994 Donation Ludwig Collection



3-2 マン・レイ《レイヨグラフ》
1927年、リヒトグラフィック
Man Ray, *Rayograph*
1927, lichtgraphik, 41.3 × 49.8 cm, ML/F 1977/0652
＊ 1977年 グルーバー夫妻より購入／1977 Acquisition Gruber



3-4 パブロ・ピカソ《眠る女》
1960年、油彩／カンヴァス
Pablo Picasso, *Woman Sleeping*
1960, oil on canvas, 54.0 × 65.0 cm, ML 01563
＊ 1994年 ルートヴィヒ・コレクションより寄贈／
1994 Donation Ludwig Collection

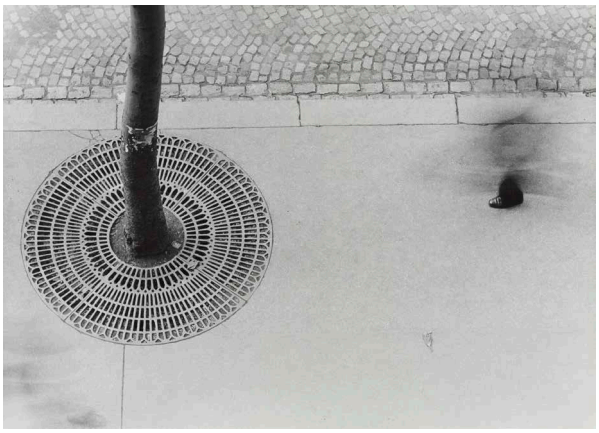
シュルレアリスムから抽象へ ── 大戦後のヨーロッパとアメリカ

第二次世界大戦後まもないヨーロッパでは、フランスを中心に、アンフォルメル（非定形）と呼ばれる絵画が隆盛した。混沌としたイメージや絵具の物質性を強調した画面は、戦争によって破壊された人間の生の回復を志向する潜在的な可能性と強靭さに満ちていた。アンフォルメルの先駆者のひとりでドイツ出身のヴォルスは、戦前にパリでシュルレアリスム運動に接近し、戦中は敵国人として収容所に送られた。1946年に再開した油彩画は、《タペストリー》（図4-2）が示すように、小さな生命体を思わせるユーモラスで繊細な有機的形態で満たされている。

アンフォルメルがヨーロッパを席捲した頃、アメリカでは抽象表現主義が花開いていた。その勃興に大きく寄与したのが、アンドレ・ブルトンやエルンストなど、1940年代初めに戦争を逃れてヨーロッパからアメリカに亡命し、人間の無意識や偶然の豊かな発露を伝えたシュルレアリストたちだった。エルンストのアメリカ時代に由来する《喜劇の誕生》（図4-1）は、この頃に画家が集中して取り組んだ仮面を描いたアイロニカルな作品である。オランダ出身のデ・クーニングは、ジャクソン・ポロックと並ぶ抽象表現主義の代表的な画家である。《無題　VII》（図4-4）は、具象と抽象の間を行き来した画家が、その画業の後期に到達した自由で軽やかな様式を示す。写真コレクションからは、シュタイナートが1951年に提唱した「主観的写真」に属する実験的な作品が出品される（図4-3）。

4-1 マックス・エルンスト《喜劇の誕生》
1947年、油彩／カンヴァス
Max Ernst, *Birth of Comedy*
1947, oil on canvas, 53.0 × 40.0 cm, ML 10042
＊ 1976年 ギュンター&カローラ・パイルより寄贈／1976 Donation Günther & Carola Peill

4-2 ヴォルス《タペストリー》
1949年、油彩／カンヴァス
Wols, *Tapestry*
1949, oil on canvas, 54.0 × 73.0 cm, ML 01167
＊ 1976年 ルートヴィヒ・コレクションより寄贈／1976 Donation Ludwig Collection



4-3 オットー・シュタイナート《片足通行人》
1950年、ゼラチン・シルバー・プリント
Otto Steinert, *Pedestrian's Foot*
1950, gelatin silver print
28.7 × 40.0 cm, ML/F 1977/0818
＊ 1977年 グルーバー夫妻より購入／1977 Acquisition Gruber
※東京会場でのみ展示

4-4 ウィレム・デ・クーニング《無題 VII》
1984年、油彩／カンヴァス
Willem de Kooning, *Untitled VII*
1984, oil on canvas, 195.0 × 223.5 cm, ML 01425
＊ 1986年ルートヴィヒ財団より寄託／
1986 Loan Ludwig Foundation

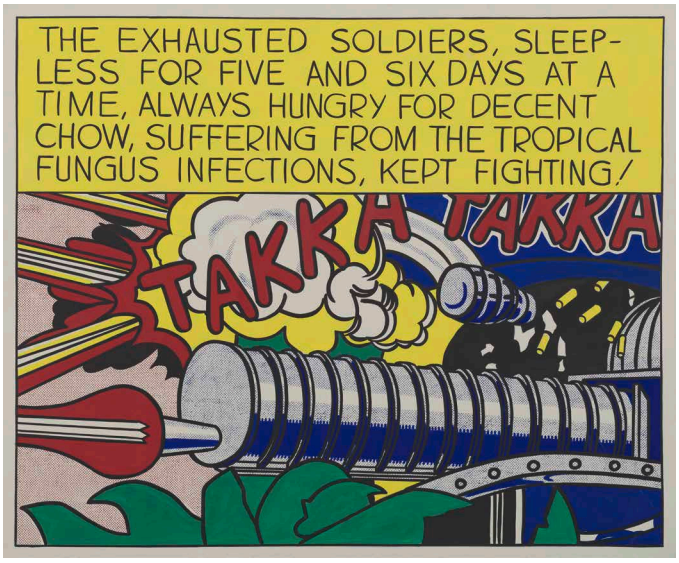
ポップ・アートと日常のリアリティ

戦後の旧西ドイツでは、経済の奇跡と呼ばれた急速な経済成長を背景に新しい美術が流入し、1968年のドクメンタ4では、今や現代美術の中心地となったアメリカのポップ・アートやミニマリズムが大きな話題を呼んだ。1960年代前半には古代や中世の美術のコレクターだったルートヴィヒ夫妻は、その後次第に、地元アーヘンにも流れ込んできた現代美術に通じていった。1967年にはニューヨークを訪れて新しい潮流に触れ、1968年には、新しく集め始めたポップ・アートをアーヘンのズュールモント美術館で公開した。短期間に爆発的な勢いで作品を収集した夫妻は、1969年、ケルンのヴァルラフ＝リヒャルツ美術館で「1960年代の美術」展としてその優れたコレクションを公開し、高い注目を浴びた。

1950年代にイギリスで始まり、アメリカで隆盛したポップ・アートは、大量消費を前提とした大衆文化を批評すると同時に、美術とは何かを問うた動向である。ジョーンズは、旗や標的、数字などの日常的な記号やモティーフをエンコースティック（蝋画）という古典的な絵画技法で描き、イメージとオブジェの境界を揺さぶった（図5-1）。リキテンスタインの《タッカ、タッカ》（図5-2）は、引用したマンガのマンガとしての体裁を保持しつつ、絵画としても成立するよう改変している。ウォーホルは、だれもが知る時代のアイコンを取り上げ、スターであることとイメージの大量消費の相関を問うた（図5-3）。写真コレクションからは、1960、70年代のアメリカ社会の現実を写し取ったウィノグランドのシリーズ〈女たちは美しい〉（図5-4）を取り上げる。

5-1 ジャスパー・ジョーンズ《0-9》
1959年、エンコースティック、新聞紙／カンヴァス
Jasper Johns, *0-9*
1959, encaustic and newspaper on canvas, 54.0 × 89.0 cm, ML 01651
＊ 2011年 ルートヴィヒ・コレクションより寄贈／2011 Donation Ludwig Collection

5-3 アンディ・ウォーホル《二人のエルヴィス》
1963年、シルクスクリーン／カンヴァス
Andy Warhol, *Two Elvis*
1963, silkscreen on canvas, 206.0 × 148.0 cm, ML 01161
＊1976年 ルートヴィヒ・コレクションより寄贈／1976 Donation Ludwig Collection



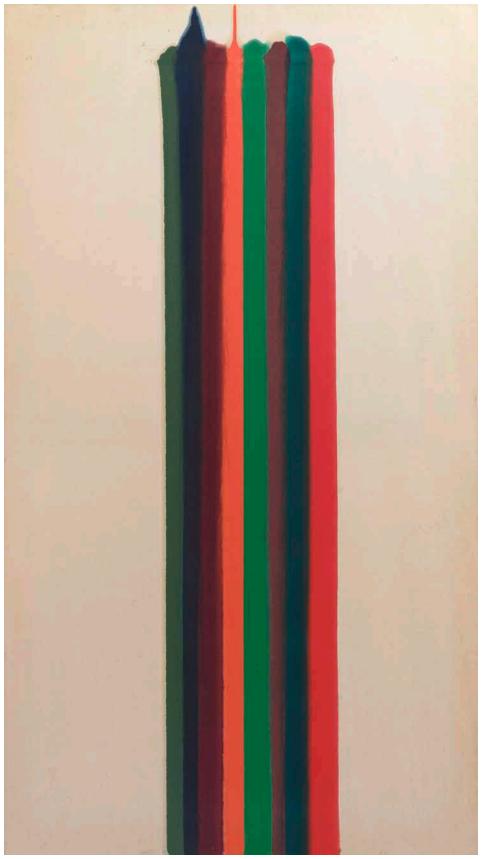
5-2 ロイ・リキテンスタイン《タッカ、タッカ》
1962年、アクリル絵具／カンヴァス
Roy Lichtenstein, *Takka Takka*
1962, acrylic on canvas, 143.0 × 173.0 cm, ML 01074
＊1976年 ルートヴィヒ・コレクションより寄贈／1976 Donation Ludwig Collection

5-4 ギャリー・ウィノグランド《無題、シリーズ〈女たちは美しい〉より》
1970年頃（プリント：1981年）　ゼラチン・シルバー・プリント
Garry Winogrand, *Untitled,* from: *Women are Beautiful*
c. 1970 (print 1981), gelatine silver print, 21.7 × 32.4 cm, ML/Dep. 7672
＊2015年　バルテンバハ家よりルートヴィヒ美術館芸術財団（ケルン）に寄贈／
2015 Donation Bartenbach family to the Kunststiftung im Museum Ludwig, Cologne

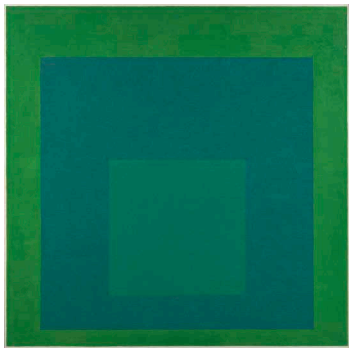
前衛芸術の諸相 —— 1960年代を中心に

ルートヴィヒ夫妻は、ポップ・アート以外にも、前衛的、抽象的な作品を数多く収集した。「1960年代の美術」展でも、観者の網膜上の知覚作用を巧みに取り込んだオプ・アートや、逆に、イリュージョンを極限まで排したミニマリズムなど、1960年代の重要な動向が押さえられていた。6章では、還元的でシンプルな形態に向かいつつも、固有の展開を遂げた芸術の諸相を紹介する。

バウハウスで教鞭をとったアルバースは、1933年、ナチ党に同校を閉鎖されてアメリカに亡命した。色彩の相互作用と視覚的効果を探究したシリーズ〈正方形へのオマージュ〉(図6-2)は、オプ・アートの展開に大きく寄与した。戦後アメリカで起こったカラー・フィールド・ペインティングは、筆致や物質性を排した大きな色面構成を特徴とする。その代表的な画家であるルイスは、素地のカンヴァスに直接絵具を滲み込ませるステイニングという技法により、純化された色彩のイリュージョンを探求した(図6-1)。1950年代後半からデュッセルドルフを拠点に活躍した前衛グループ「ゼロ」は、造形作品はもとより、パフォーマンスや出版、国際的な展覧会の企画など多彩な活動を行った。ゼロが好んだ反復する構造は、素材の効果ともあいまって運動や光の感覚を呼び起こす(図6-3)。ヨーゼフ・ボイスの愛弟子として知られるパレルモは、1970年代より、アルミ板に色を塗った金属絵画において発色や色の組み合わせを探究し、変化に富んだインスタレーション風の展示を試みた(図6-4)。

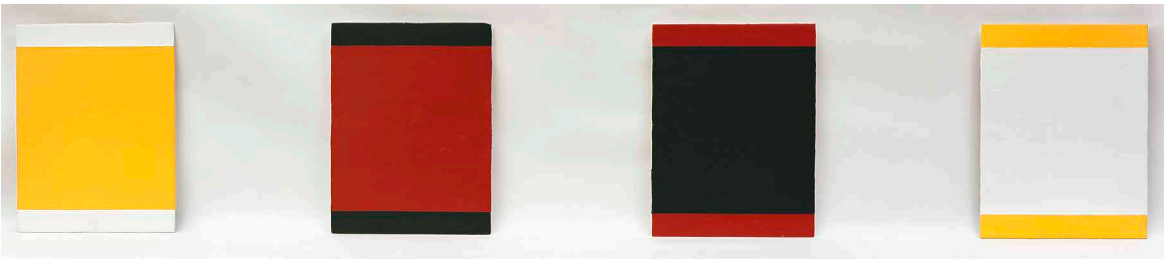


6-1 モーリス・ルイス《夜明けの柱》
1961年、アクリル絵具／カンヴァス
Morris Louis, *Pillar of Dawn*
1961, acrylic on canvas
220.0 × 122.0 cm, ML 01091
＊ 1976年 ルートヴィヒ・コレクションより寄贈／1976 Donation Ludwig Collection



6-2 ジョゼフ・アルバース《正方形へのオマージュ：緑の香》
1963年、油彩／硬質繊維板
Josef Albers, *Homage to the Square: Green Scent*
1963, oil on hardboard panel
121.0 × 121.0 cm, ML 01000
＊ 1976年 ルートヴィヒ・コレクションより寄贈／1976 Donation Ludwig Collection

6-3 ハインツ・マック《天使の5つの翼》
1965年、プレキシガラス、アルミニウム、木
Heinz Mack, *Five Wings of an Angel*
1965, plexiglas, aluminum, and wood
204.0 × 103.0 × 6.0 cm, ML 01093
＊ 1976年 ルートヴィヒ・コレクションより寄贈／1976 Donation Ludwig Collection



6-4 ブリンキー・パレルモ《四方位 I》
1976年、4枚組：アクリル絵具／アルミニウム
Blinky Palermo, *Cardinal Points I*
1976, four parts; acrylic on aluminum
each 26.7 × 21.0 cm, ML 01267
＊ 1994年 ルートヴィヒ・コレクションより寄贈／1994 Donation Ludwig Collection

拡張する美術 —— 1970年代から今日まで

第7章では、旧東西ドイツの美術の交流や、現代美術の購入と振興をめぐるルートヴィヒ美術館の活動なども参照しつつ、映像やパフォーマンスなど多様に展開した現代美術の諸相を紹介する。ボイスは、社会と芸術をつなぐ「社会彫刻」を提唱し、デュッセルドルフ芸術アカデミーでは多くの後進も育てた。本章では、神話に基づく彫刻が出品される（図7-1）。戦後まもなく西側に移った旧東ドイツ出身のバゼリッツは、1960年代、国の分断によるアイデンティティの喪失を思わせる、荒野に立つ無防備で傷ついた兵士や羊飼いを描いた。《鞭を持つ女》（図7-2）ではそれが女性に変わり、痛みを与える鞭を手にする。冷戦時代にルートヴィヒ夫妻は、コレクションを旧東ドイツに貸与して展示したり、東側の作品を購入したりするなど、東西ドイツの架橋に尽力した。旧東のライプツィヒ派の画家で、閉塞的な社会状況を象徴的に描いたマットホイアーの《今度は何》（図7-3）も夫妻の購入による。

今日ルートヴィヒ美術館は、個人コレクター以外にも、さまざまな形で市民の支援を受けている。1985年に設立された会員制の独立した組織、ルートヴィヒ美術館ケルン現代美術協会は、作品の購入や、展覧会の開催や出版を支援している。キッペンベルガーの《無題、シリーズ〈戦争悪〉より》（図7-4）は、この協会の協力で所蔵された。また本章では、優れた現代作家を顕彰する「ヴォルフガング・ハーン賞」（1994年～）や、若手作家の作品を購入する「ユンガー・アンカウフ」（2005年～）など、協会のユニークな活動を通じて所蔵された2000年代以降の作品も出品される。

7-4 マルティン・キッペンベルガー《無題、シリーズ〈戦争悪〉より》
1991年、油彩、グラファイト鉛筆／カンヴァス
Martin Kippenberger, *Untitled* (from the *War Wicked* series)
1991, oil and graphite pencil on canvas, 250.0 × 300.0 cm, ML/Dep. 7193
＊ 1996年 ルートヴィヒ美術館ケルン現代美術協会より永久寄託／
1996 Permanent loan Gesellschaft für Moderne Kunst am Museum Ludwig Köln e. V.

7-2 ゲオルク・バゼリッツ《鞭を持つ女》
1965年、油彩／カンヴァス
Georg Baselitz, *The Woman with the Whip*
1965, oil on canvas, 162.0 × 130.0 cm, ML 01253
＊ 1976年 ルートヴィヒ・コレクションより寄贈／
1976 Donation Ludwig Collection

7-3 ヴォルフガング・マットホイアー《今度は何》
1980年、油彩／硬質繊維板
Wolfgang Mattheuer, *What Now?*
1980, oil on hardboard panel, 101.0 × 126.0 cm, ML 01349
＊ 1984年 ルートヴィヒ財団より寄託／1984 Loan Ludwig Foundation

7-1 ヨーゼフ・ボイス《シビュラ／ユスティティア》
1957年、ブロンズ
Joseph Beuys, *Sibyl / Justice*
1957, bronze, 50.0 × 185.0 × 24.0 cm, ML 01182
＊ 1976年 ルートヴィヒ・コレクションより寄贈／1976 Donation Ludwig Collection

年表 Chronology

●:展覧会　○:書籍　◆:その他動向　＊:プレスリリース掲載作品

1900 1910 1920 1930 1940 1950 1960 1970 1980 1990 2000 2010 2020

ルートヴィヒ美術館に関する歴史

- 1936 ヴァルラフ＝リヒャルツ美術館（以下WRM）開館75周年
- 1937 ナチスの「芸術委員会」がWRMから47点の作品を「退廃芸術」として接収（後に一部売却）
- 1943 爆撃によりWRM建物が破壊される（収蔵作品は事前に疎開）
- 1946 ヨーゼフ・ハウプリヒからケルン市に作品寄贈
  旧ケルン大学校舎で「ハウプリヒ・コレクション」として公開
- 1950 ペーター・ルートヴィヒがピカソの論文で博士号取得
- 1957 WRM建物竣工
  ゲオルク＆リリー・フォン・シュニッツラー夫妻から
  ベックマンの油彩画10点を廉価で購入
- 1958 ヴィルヘルム・シュトレッカー旧蔵の40点余りの作品を購入
- 1961 ハウプリヒ、バート・ミュンスターアイフェルで死去
- 1969 「1960年代の美術」展（WRM）でペーター＆イレーネ・
  ルートヴィヒ夫妻コレクション初公開
- 1976 ルートヴィヒ夫妻からケルン市に作品寄贈
  さらに専用の美術館創設を申し出る
  ルートヴィヒ夫妻が美術館創設の契約を交わす
  ルートヴィヒ夫妻からロシア・アヴァンギャルドの写真130点寄贈
  ギュンター＆カローラ・バイル夫妻から油彩画コレクション寄贈
- 1977 レオ・フリッツ＆レナーテ・グルーバー夫妻から写真コレクション寄贈・購入
  以後も夫妻から何度か寄贈・購入
- 1983 バイル夫妻から素描・版画コレクション寄贈
- 1985 アグファ・フォト・ヒストラマが形成される
  2005年までに全作品がルートヴィヒ美術館に入る
  ルートヴィヒ美術館現代美術協会設立
- 1986 WRMとルートヴィヒ美術館が開館（2館は同一建物内に
  オープン。WRM旧建物はケルン応用芸術博物館に移管）
- 1994 ルートヴィヒ夫妻から90点のピカソ作品寄贈
  「ヴォルフガング・ハーン賞」はじまる
- 1996 ペーター・ルートヴィヒ、アーヘンで死去
- 2001 WRMが移転し、ルートヴィヒ美術館が展覧会「我らの
  希望の美術館」で再オープン
  イレーネ・ルートヴィヒから774点のピカソ作品寄贈
- 2005 「ユンガー・アンカウフ」はじまる
- 2008 ルートヴィヒ美術館美術財団が立ち上げ
- 2010 イレーネ・ルートヴィヒ、
  アーヘンで死去
- 2011 イレーネの遺志によりロシア・
  アヴァンギャルドの作品および
  26点の近代絵画作品寄贈

美術史（ドイツおよび本展出品作品）

- 1903 ＊ デュールコープ《読書する若い女》（図1-5）
- 1905 ◆「ブリュッケ（橋）」結成（ドレスデン）：キルヒナー、ヘッケル他
- 1906 ● 第1回「ブリュッケ」展（ドレスデン）：キルヒナー、ヘッケル他出品
- 1911 ● 第1回「青騎士」編集部展（ミュンヘン）：
  カンディンスキー、マルク他出品
  ＊ ヴラマンク《花と果物のある静物》（図3-1）
- 1912 ○ 年刊誌『青騎士』創刊
  ●「ゾンダーブント」展（ケルン）：
  ポスト印象派以降の国際的な動向をドイツに紹介
  ハウプリヒも見ていた
- 1913 ● 第1回ドイツ秋季サロン展（ベルリン）：
  当時のヨーロッパ美術を包括した展示
  ＊ ヘッケル《森の中の情景》（図1-1）
- 1914 ●ドイツ工作連盟展（ケルン）
- 1916 ＊ ゴンチャローワ《オレンジ売り》（図2-2）
  ＊ マレーヴィチ《スプレムス 38番》（図2-1）
- 1919 ◆ バウハウス創設（ヴァイマール）
- 1920 ● 第1回国際ダダ見本市（ベルリン）：
  ベルリン・ダダの集大成
  ＊ カンディンスキー《白いストローク》（図1-2）
- 1922 ● 第1回デュッセルドルフ国際美術展：国際的なアヴァンギャルド芸術展
  ● 第1回ロシア美術展（ベルリン）：マレーヴィチ、タトリン、ロトチェンコ他出品
  ロシア構成主義がドイツで注目される
- 1925 ●「ノイエ・ザハリヒカイト（新即物主義）」展（マンハイム）：
  ディックス、ベックマン、グロース他出品
  ◆ バウハウス：デッサウに移転
- 1927 ● ザンダー『20世紀の人間たち』（写真シリーズ）の一部を展示（ケルン）
  ＊ マン・レイ《レイヨグラフ》（図3-2）
- 1928 ＊ グロス《エドゥアルト・ブリーチュ博士の肖像》（図1-3）
  ＊ ベックマン《リリー・フォン・シュニッツラーの肖像》（または1929年制作）（図0-1）
- 1929 ○ ザンダー『時代の顔』（写真集）
  ●「ドイツ工作連盟国際展 映画と写真」（シュトゥットガルト）
- 1930 ＊ ゼルマ《村祭りと荷馬車》（または1934年制作）（図2-3）
- 1931 ○ ベンヤミン『写真小史』
- 1932 ◆ バウハウス：デッサウ校閉校
- 1933 ◆ バウハウス解散
  ＊ バルラハ《うずくまる老女》（図1-4）
- 1934 ＊ ロトチェンコ《ライカを持つ少女》（図2-4）
- 1936 ○ ベンヤミン『複製技術時代の芸術』
  ＊ バイヤー《メタモルフォーゼ》（図1-6）
- 1937 ● ナチスによる「退廃芸術」展（ミュンヘン他巡回）と
  「大ドイツ美術」展（ミュンヘン）
- 1941 ＊ ピカソ《アーティチョークを持つ女》（図3-3）
- 1947 ＊ エルンスト《喜劇の誕生》（図4-1）
- 1949 ●「現代ドイツ絵画・彫刻」展（ケルン）
  ＊ ヴォルス《タペストリー》（図4-2）
- 1950 ＊ シュタイナート《片足通行人》（図4-3）
- 1951 ＊ ディクス《ヨーゼフ・ハウプリヒ博士の肖像》（図0-2）
- 1955 ● 第1回ドクメンタ（カッセル）
- 1957 ◆ グループ・ゼロ結成（デュッセルドルフ）：
  マック、ピーネ、ユッカー
  ＊ ボイス《シビュラ／ユスティティア》（図7-1）
  ＊ アンリ《ギュンター＆カローラ・バイル》（図0-3）
- 1959 ● 第2回ドクメンタ（カッセル）：
  アメリカ抽象表現主義絵画が注目される
  ＊ ジョーンズ《0-9》（図5-1）
- 1960 ＊ ピカソ《眠る女》（図3-4）
- 1961 ◆ ボイス：デュッセルドルフ美術学校彫刻科教授に就任（～1972年）
  ＊ ルイス《夜明けの柱》（図6-1）
- 1962 ＊ リキテンスタイン《タッカ、タッカ》（図5-2）
- 1963 ＊ ウォーホル《二人のエルヴィス》（図5-3）
  ＊ アルバース《正方形へのオマージュ：緑の香》（図6-2）
- 1965 ● ヌル国際美術展（アムステルダム）：グループ・ゼロ、具体美術協会他出品
  ＊ マック《天使の5つの翼》（図6-3）
  ＊ バゼリッツ《鞭を持つ女》（図7-2）
- 1968 ● 第4回ドクメンタ（カッセル）：
  ポップ・アートとミニマル・アートが注目される
- 1969 ●「態度が形になるとき：作品―概念―過程―状況―情報」展（ベルン）：
  ボイス他出品。プロセス・アート
- 1970 ＊ ウィノグランド《無題、シリーズ〈女たちは美しい〉より》（図5-4）
- 1972 ● 第5回ドクメンタ（カッセル）：
  ディレクターにハラルド・ゼーマン。以降ドクメンタは5年毎に開催
- 1976 ◆ ベッヒャー：デュッセルドルフ美術学校写真科教授に就任
  ＊ バレルモ《四方位 I》（図6-4）
- 1977 ● 第6回ドクメンタ（カッセル）：マットホイアー等旧東ドイツの画家他出品
  ● 第1回ミュンスター彫刻プロジェクト：ジャド、オルデンバーグ他出品。以降10年毎に開催
- 1979 ● ボイスの大回顧展（ニューヨーク）
- 1980 ＊ ウォーホル《ペーター・ルートヴィヒの肖像》（図0-4）
  ＊ マットホイアー《今度は何》（図7-3）
- 1982 ● 第7回ドクメンタ（カッセル）：ボイス「7000本の樫の木」プロジェクト
  ●「ツァイトガイスト（時代精神）」展（ベルリン）：
  ボイス、バゼリッツ、ウォーホル他出品。新表現主義
- 1984 ＊ デ・クーニング《無題 VII》（図4-4）
- 1991 ＊ キッペンベルガー《無題、シリーズ〈戦争悪〉より》（図7-4）
- 1992 ◆ ライプツィヒの旧紡績工場が複合施設「シュピネライ」としてオープン
- 1995 ●「ベルリン－モスクワ／モスクワ－ベルリン 1900-1950年」展（ベルリン）
- 1997 ● 第10回ドクメンタ（カッセル）：
  初の女性ディレクターとしてカトリーヌ・ダヴィッドが就任。クリティカル・アート
  ●「ドイチュラントビルダー」展（ベルリン）：
  20世紀「ドイツ」美術の大展覧会、副題「分断された国の芸術」
- 1998 ● 第1回ベルリン・ビエンナーレ
- 2001 ◆ ベルリン・ユダヤ博物館開館
- 2002 ● 第11回ドクメンタ（カッセル）：
  初のヨーロッパ人以外のディレクターとしてナイジェリア
  出身のオクウィ・エンヴェゾーが就任。多文化主義

美術史（フランス、アメリカ、ロシア他）

- 1904 ◆ ピカソ：「洗濯船」（パリ・モンマルトル）に移り住む
- 1905 ● 第3回サロン・ドートンヌ展（パリ）：マティス、ドラン、ヴラマンク他出品
  フォーヴィスムが注目される
- 1908 ◆ ピカソ：キュビスムの時代はじまる（～1916年頃）
- 1915 ●「最後の未来派展、0-10」
  （ペトログラード/ 現・サンクトペテルブルク）：
  マレーヴィチのスプレマティズム絵画出品。ロシア未来派
- 1924 ○ ブルトン『シュルレアリスム宣言』（パリ）
- 1925 ● 第1回シュルレアリスム展（パリ）：
  エルンスト、アルプ、マン・レイ、クレー、ピカソ他出品
- 1931 ◆「アブストラクシオン＝クレアシオン（抽象＝創造）」結成（パリ）：
  エルバン、モンドリアン、カンディンスキー、アルプ他。国際的な抽象美術運動
- 1933 ◆ ブラック・マウンテン・カレッジ設立（ノースカロライナ）
- 1937 ● パリ万国博覧会、ピカソ《ゲルニカ》出品
  ◆ ニュー・バウハウス設立（シカゴ）
- 1951 ●「激情の対決―非具象絵画の最先端」展（パリ）：
  アンフォルメル
- 1956 ●「これが明日だ」展（ロンドン）：
  ハミルトン他出品。イギリスのポップ・アート
- 1962 ●「ニュー・リアリスツ」展（ニューヨーク）：
  ウォーホル、リキテンスタイン他出品。アメリカのポップ・アート
- 1964 ●「ポスト・ペインタリー・アブストラクション」展（ロサンゼルス）：
  ルイス、ノーランド他出品
- 1966 ●「プライマリー・ストラクチュアズ」展（ニューヨーク）：
  ジャド他出品。ミニマル・アート
- 1969 ●「アンチ・イリュージョン：手続き／素材」展（ニューヨーク）：
  ハーケ、ヘス、モリス他出品。プロセス・アート
- 1984 ●「20世紀美術におけるプリミティヴィズム」展（ニューヨーク）：多文化主義
- 1989 ●「大地の魔術師たち」展（パリ）：多文化主義
- 1990 ●「ハイ・アンド・ロウ：近代美術と大衆文化」展（ニューヨーク）
- 1995 ●「フェミナン／マスキュラン」展（パリ）：ジェンダー
- 1996 ●「トラフィック」展（ボルドー）：リレーショナルアート
- 1997 ●「シティーズ・オン・ザ・ムーヴ」展（ウィーン）：多文化主義、東アジアに焦点
- 1998 ●「アクション 行為がアートになるとき 1949-1979」展
  （ロサンゼルス、東京）

ドイツを中心とした政治・社会史

- 1904 日露戦争（～1905年）
- 1914 第一次世界大戦はじまる（～1918年）
- 1917 ロシア革命、ソヴィエト連邦成立
- 1918 第一次世界大戦終結
- 1919 ヴァイマール共和国発足、ヴェルサイユ条約受諾
- 1923 関東大震災
- 1929 世界恐慌
- 1931 満州事変
- 1933 ヒトラー首相に就任
- 1934 ヒトラー総統に就任
- 1936 スペイン内戦（～1939年）
  ベルリン・オリンピック
- 1938 ドイツ・オーストリア合邦
- 1939 第二次世界大戦はじまる（～1945年）
- 1940 パリ陥落
- 1941 太平洋戦争はじまる（～1945年）
- 1945 ドイツ敗北、第二次世界大戦終結
- 1949 ドイツ連邦共和国創設（西ドイツ）、ドイツ民主共和国創設（東ドイツ）
- 1961 ベルリンの壁の建設
- 1963 アウシュヴィッツ裁判（～1965年）
- 1964 トンキン湾事件、ベトナム戦争本格化（～1975年）
- 1972 ミュンヘン・オリンピック
- 1983 緑の党、
  連邦議会選挙（旧西独）で
  議席獲得
- 1989 東欧革命、ベルリンの壁崩壊
- 1990 東西ドイツ統一
  湾岸戦争（～1991年）
- 1991 ベルリンへの首都移転決定
  ソヴィエト連邦崩壊
- 1992 欧州連合条約（マーストリヒト条約）
- 1999 ユーロ導入
- 2001 アメリカ同時多発テロ事件
- 2011 東日本大震災
  ドイツで脱原発法可決

ルートヴィヒ美術館展

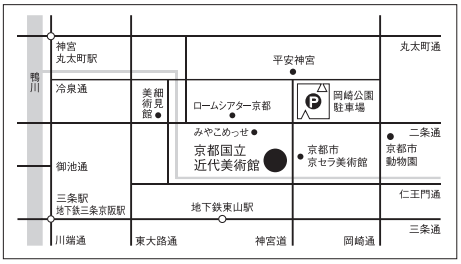
20世紀美術の軌跡 ── 市民が創った珠玉のコレクション

［展覧会HP］ **https://ludwig.exhn.jp**

The exhibition was produced in close collaboration with Museum Ludwig, Cologne.

京都会場

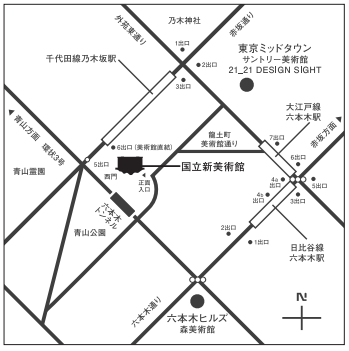
会　　期：2022年10月14日（金）—2023年1月22日（日）
会　　場：京都国立近代美術館（〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町）
主　　催：京都国立近代美術館、ルートヴィヒ美術館、日本経済新聞社、テレビ大阪、BS-TBS、京都新聞
後　　援：ドイツ連邦共和国総領事館
開館時間：10:00–18:00
※毎週金曜日は20:00まで　※入館は閉館の30分前まで
※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開館時間は変更となる場合があります。来館前に最新情報をご確認ください。



休 館 日：月曜日（ただし、12月26日と1月9日は開館）、12月29日～1月3日
問い合わせ：京都国立近代美術館 075-761-4111（代表）
美術館HP：https://www.momak.go.jp/
観 覧 料：一般2,000円（1,800円）、大学生1,100円（900円）、高校生600円（400円）
※（　）内は前売および20名以上の団体料金　※ 中学生以下無料
※ 前売券は８月22日（月）～10月13日（木）までの限定販売
アクセス：● 京都市バス「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車すぐ、「岡崎公園 ロームシアター京都・みやこめっせ前」下車徒歩約5分、「東山二条・岡崎公園口」下車徒歩約10分　● 地下鉄東西線「東山駅」下車徒歩約10分
※当館には駐車場がございません。近隣の有料駐車場をご利用ください
※岡崎公園駐車場をご利用の有料入館者は、駐車場の割引（1台につき1回）を受けられますので駐車券をお持ちの上お越しください

東京会場

会　　期：2022年6月29日（水）—9月26日（月）
会　　場：国立新美術館 企画展示室2E（〒106-8558 東京都港区六本木 7-22-2）
主　　催：国立新美術館、ルートヴィヒ美術館、日本経済新聞社、TBS、BS-TBS
後　　援：ドイツ連邦共和国大使館
開館時間：10:00–18:00
※毎週金・土曜日は20:00まで ※入場は閉館の30分前まで



休 館 日：毎週火曜日
問い合わせ：050-5541-8600（ハローダイヤル）
美術館HP：https://www.nact.jp
観 覧 料：決まり次第、展覧会HPでお知らせします。
アクセス：東京メトロ千代田線 乃木坂駅 青山霊園方面改札6出口（美術館直結）
東京メトロ日比谷線 六本木駅 4a出口から徒歩約5分
都営地下鉄大江戸線 六本木駅 7出口から徒歩約4分
※美術館に駐車場はございません。

広報事務局連絡先

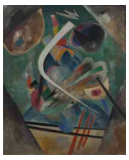
京都会場
「ルートヴィヒ美術館展　20世紀美術の軌跡—市民が創った珠玉のコレクション」（京都会場）
広報事務局（株式会社TMオフィス内）　担当：馬場・大江・西坂
TEL:06-6231-4426　FAX:06-6231-4440　Mail:ludwig@tm-office.co.jp
〒541-0046 大阪市中央区平野町4-7-7 平野町イシカワビル8F　平日9:30–17:30 ＊土日祝日の対応はしておりません

東京会場
「ルートヴィヒ美術館展　20世紀美術の軌跡—市民が創った珠玉のコレクション」（東京会場）
広報事務局（株式会社OHANA内）　担当：高橋・細川・妹尾
TEL:03-6869-7881　FAX:03-6869-7801　Mail:ludwig@ohanapr.co.jp
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-5-6 りそな九段ビル5F　平日10:00–17:00 ＊土日祝日の対応はしておりません

ドイツと日本
Zukunft gestalten
ともに未来へ

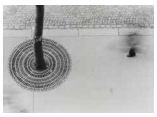
作品クレジット Credit Title

0-1 ■

1-2 ■■


2-1 ■■

3-2

4-3


5-4

7-1 ■

0-2

1-3

2-2 ■

3-3 ■

4-4

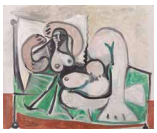
6-1 ■■

7-2

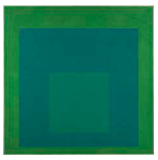
0-3

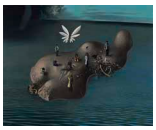
1-4 ■■

2-3

3-4


5-1 ■

6-2


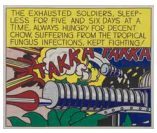
7-3


0-4 ■

1-5 ■

2-4 ■■

4-1 ■

5-2 ■


6-3 ■

7-4

1-1 ■

1-6

3-1 ■

4-2 ■■

5-3

6-4

0-1 ■ マックス・ベックマン《リリー・フォン・シュニッツラーの肖像》
1928/29年頃 グラファイト／紙 26.5×36.2 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML/Z 1974/025. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_c002430)

0-2 オットー・ディクス《ヨーゼフ・ハウプリヒ博士の肖像》
1951年 油彩／カンヴァス 100.0×81.5 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 76/2869. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, Sabrina Walz, rba_d015778)

0-3 フローレンス・アンリ《ギュンター＆カローラ・バイル》
1957年 ゼラチン・シルバー・プリント 17.3×16.7 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML/F 1983/0013. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_c011464)

0-4 ■ アンディ・ウォーホル《ペーター・ルートヴィヒの肖像》
1980年 アクリル絵具／カンヴァス 105.0×105.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 10076. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_c002430)
© 2021 The Andy Warhol Foundation for the Visual Arts, Inc. / Licensed by ARS, New York & JASPAR, Tokyo C3665

1-1 ■ エーリヒ・ヘッケル《森の中の情景》
1913年 油彩／カンヴァス 70.0×81.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 76/2747. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_d024702)
© VG BILD-KUNST, Bonn & JASPAR, Tokyo, 2022 C3777

1-2 ■■ ワシリー・カンディンスキー《白いストローク》
1920年 油彩／カンヴァス 98.0×80.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 10003. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_d056273_01)

1-3 ジョージ・グロス《エドゥアルト・プリーチュ博士の肖像》
1928年 油彩／カンヴァス 110.0×79.5 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 76/2814. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_d056425_01)

1-4 ■■ エルンスト・バルラハ《うずくまる老女》
1933年 木 56.0（高さ）×33.0×30.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 76/SK 0047. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_c005052)

1-5 ■ ルードルフ・デュールコープ《読書する若い女》
1903年 ピグメント印画／厚紙 15.0 × 11.0 cm（イメージ）／19.2 × 14.7 cm（台紙）
Museum Ludwig, Köln / Cologne, FH 03259. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, Patrick Schwarz, rba_d044318)

1-6 ヘルベルト・バイヤー《メタモルフォーゼ》
1936年 ゼラチン・シルバー・プリント 25.6 × 34.2 cm（イメージ）／28.0 × 35.4 cm（台紙）
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML/F 1977/0056. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_d046721)

2-1 ■■ カジミール・マレーヴィチ《スプレムス 38番》
1916年 油彩／カンヴァス 102.5×67.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 01294. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_d033965_01)

2-2 ■ ナターリヤ・ゴンチャローワ《オレンジ売り》
1916年 油彩／カンヴァス 131.0×97.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 01484. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, Patrick Schwarz, rba_d050885_01)
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2021 C3665

2-3 ゲオルギ・ゼルマ《村祭りと荷馬車》
1930/34年 ゼラチン・シルバー・プリント 17.4×23.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML/F 1992/0112. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_c009396)

2-4 ■■ アレクサンドル・ロトチェンコ《ライカを持つ少女》
1934年（プリント：1934年以降） ゼラチン・シルバー・プリント 40.0×29.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML/F 1978/1072. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_c009362)

3-1 ■ モーリス・ド・ヴラマンク《花と果物のある静物》
1911年 油彩／カンヴァス 60.0×73.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 76/2773. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_d024750_01)
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 C3756

3-2 マン・レイ《レイヨグラフ》
1927年 リヒトグラフィック 41.3 × 49.8 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML/F 1977/0652. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, Marleen Scholten, rba_d056469)

3-3 ■ パブロ・ピカソ《アーティチョークを持つ女》
1941年 油彩／カンヴァス 195.0×130.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 01291. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_c004725)
© 2022 - Succession Pablo Picasso - BCF(JAPAN)

3-4 パブロ・ピカソ《眠る女》
1960年 油彩／カンヴァス 54.0×65.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 01563. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, Britta Schlier, rba_d038667_01)
© 2022 - Succession Pablo Picasso - BCF(JAPAN)

4-1 ■ マックス・エルンスト《喜劇の誕生》
1947年 油彩／カンヴァス 53.0×40.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 10042. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_c024191)
© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 C3756

4-2 ■■ ヴォルス《タペストリー》
1949年 油彩／カンヴァス 54.0×73.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 01167. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, Peter Kunz, rba_d032855_01)

4-3 オットー・シュタイナート《片足通行人》
1950年 ゼラチン・シルバー・プリント 28.7×40.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML/F 1977/0818. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, Britta Schlier, rba_d017396)

4-4 ウィレム・デ・クーニング《無題 VII》
1984年 油彩／カンヴァス 195.0×223.5 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 01425. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_c004463)

5-1 ■ ジャスパー・ジョーンズ《0-9》
1959年 エンコースティック、新聞紙／カンヴァス 54.0×89.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 01651. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, Britta Schlier, rba_d032627)
© Jasper Johns/VAGA at ARS, NY/JASPAR, Tokyo, 2022 C3756

5-2 ■ ロイ・リキテンスタイン《タッカ、タッカ》
1962年 アクリル絵具／カンヴァス 143.0×173.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 01074. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, Sabrina Walz, rba_d053188_01)
© Estate of Roy Lichtenstein, New York & JASPAR, Tokyo, 2022 C3756

5-3 アンディ・ウォーホル《二人のエルヴィス》
1963年 シルクスクリーン／カンヴァス 206.0×148.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 01161. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_c007687)

5-4 ギャリー・ウィノグランド《無題、シリーズ〈女たちは美しい〉より》
1970年頃（プリント：1981年） ゼラチン・シルバー・プリント 21.7×32.4 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML/Dep. 7672. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_d046395)

6-1 ■■ モーリス・ルイス《夜明けの柱》
1961年 アクリル絵具／カンヴァス 220.0×122.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 01091. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_d040139)

6-2 ジョゼフ・アルバース《正方形へのオマージュ：緑の香》
1963年 油彩／硬質繊維板 121.0×121.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 01000. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_d056428_01)

6-3 ■ ハインツ・マック《天使の5つの翼》
1965年 プレキシガラス、アルミニウム、木 204.0×103.0×6.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 01093. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_c010884)
© VG BILD-KUNST, Bonn & JASPAR, Tokyo, 2022 C3756

6-4 ブリンキー・パレルモ《四方位 I》
1976年 4枚組：アクリル絵具／アルミニウム 各 26.7×21.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 01267. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_c000327)

7-1 ■ ヨーゼフ・ボイス《シビュラ／ユスティティア》
1957年 ブロンズ 50.0×185.0×24.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 01182. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, Sabrina Walz, rba_c015117)
© VG BILD-KUNST, Bonn & JASPAR, Tokyo, 2022 C3756

7-2 ゲオルク・バゼリッツ《鞭を持つ女》
1965年 油彩／カンヴァス 162.0×130.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 01253. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, Britta Schlier, rba_d005496)

7-3 ヴォルフガング・マットホイアー《今度は何》
1980年 油彩／硬質繊維板 101.0×126.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML 01349. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, Sabrina Walz, rba_d045837_01)

7-4 マルティン・キッペンベルガー《無題、シリーズ〈戦争悪〉より》
1991年 油彩、グラファイト鉛筆／カンヴァス 250.0×300.0 cm
Museum Ludwig, Köln / Cologne, ML/Dep. 7193. (Photo: © Rheinisches Bildarchiv Köln, rba_c012375)
© Estate of Martin Kippenberger, Galerie Gisela Capitain, Cologne

P3はすべて、Museum Ludwig, Köln / Cologne © AR

■：著作権の保護期間が終了した作品　■：広報用画像　＊著作権継承者のご所在が不明のため、本リリース発行について事前許諾を取得できなかった作品がありました。お心当たりの方は広報事務局までご連絡ください。